

# 久留米 高専通信

**特集号**

久留米工業高等専門学校 〒830-8555 福岡県久留米市小森野1-1-1

**安部 龍太郎氏**

第148回直木賞作家

## 記念対談

久留米工業高等専門学校(久留米高専)創立50周年、前身の久留米高等工業学校創立から75周年を記念して、国立高等専門学校機構の小畑秀文理事長と久留米高専卒業で直木賞作家の安部龍太郎氏の対談が行われました。教育論や人生観などについて和やかに語りあい、安部氏は学生時代を「自主性を重んじる校風が役立つ」と振り返りました。小畑理事長は「グローバル化に対応して、高専の質をさらに高めたい」などと将来へ向け決意を語りました。

**小畑 秀文氏**

国立高専機構 理事長

### 久留米高専への入学動機は!?

**小畑** 改めまして昨年の直木賞受賞、おめでとうございます。安部さんが高専出身であることがマスコミに取り上げられたことで、高専が社会に広く知られる一つのきっかけになって、大変ありがたく思っています。

**安部** ありがとうございます。

**小畑** 高専というと工学系の学科がほとんどです。安部さんは高専の機械工学科を卒業され、現在は作家として活躍がされているわけですが、第三者的に見ると、その間にはかなりギャップが感じられます。それです、安部さんが久留米高専に入学された動機をお話いただければと思います。

**安部** 僕が生まれたところは、福岡県八女郡の黒木町(現八女市黒木町)です。

中学3年になったとき、自分の進路をどうしようかと考えてい

たとき、信頼している担任の先生が「おまえ、久留米高専を受けたらどうか」と勧めてくれました。その先生を信頼していましたが、高専には田舎の中学から毎年1人ぐらしか入れないくらい難しい学校だったのです。その頃、競争率が4倍を超えており、挑戦してみたいと思ったのが一つの動機でした。

もう一つは授業料が安かったのです。僕たちの頃は年間9,800円でした。家にあまり迷惑や負担をかけないで進学、しかも5年制学校に行けるので、いいなと思ったのがきっかけでした。

### ラグビーのけが、文学との出会い!

**小畑** そうですか。久留米高専は現在でも優秀な学生が集まっていますが、安部さんが入られた当時の授業やクラブ活動、学校での生活はどのような状況だったのでしょうか。

**安部** 1年、2年ぐらいの頃は一生懸命勉強していたのですが、だんだんと工学関係の科目が増えてきて、自分はどうも工

学系の勉強には合わないのではないかという感じを少しずつ持ってきたのです。それで、勉強もそれなりにしていましたけど、その分クラブ活動のラグビーに熱中して発散していました。

ところが、試合中に鎖骨を骨折し、ちょっと重かったものから、ラグビーを続けられなくなりました。その時に、自分は何のために高専にいるのだらうと、3年になったとき非常に強く思い始め、学校にお願いして、1年間休学させてもらいました。

自分なりの勉強をその1年間続けている間に、文学と出会って、自分自身が救われたのです。文学が人の心を救えるなら、自分もそういう仕事に就きたいと思ったのが最初でした。

**小畑** なるほど。安部さんの場合、久留米高専で学んでいる間に、自分の適性がどこにあるのかをじっくりと考える時期があったということですね。卒業されて、大田区役所に就職されましたね。

**安部** はい、そうです。

## 高専に入って良かったと思うことは!?

**小畑** そうすると、民間企業の現場でモノをつくるエンジニアの仕事を選ぶのではなく、自分の本当の適性が違うところにあるという結果が、就職先として大田区役所を選ばれたことなのだろうと思います。今、作家として活躍されている中で、高専で学んだことが役に立っているとか、振り返ってよかったと思うことはありますかでしょうか。

**安部** 卒業して時間がたてばたつほど、高専で学んだことが自分を支えてくれているなど強く感じます。まず、非常に良い友人たちに恵まれたことです。僕たちの頃は、家庭が貧しくて、大学にやれるほどの経済力はないけども、優秀なので何とか勉強させたいという感じの友人たちが多かったのです。まじめで、人間の芯がしっかりしている友人たちに恵まれたということです。

もう一つは先生たちです。久留米高専は、ちょっとパンカラな校風を残していたところで、先生たちも学生を一人前の大人として扱って、自主性を非常に重んじてくれたのです。おまえは学生だから言うことを聞きなさいみたいな接し方ではなく、一緒に悩んだり、議論したりして、我々と接していただきました。在学中だけじゃなく、卒業してからも、ずっと応援をいただいたり、悩みを聞いていただいたりする先生がたくさんいらっしゃったのです。恵まれていたと思います。

**小畑** 良い学校とは、そこで行われる授業がすばらしく、良い仲間が集まってきて、恩師もいろいろ人間的な意味で良い指導をしてくれ、先輩後輩のつながりもすばらしいことが大きな要素であると私はよく言います。表現はちょっと違うかもしれませんが、先生もそういうふうな、つながりがよかったということでしょうか。

**安部** いまだに会って一緒に酒が飲める先生たち、先輩後輩

などのつながりが続いていますので、それは本当にありがたいことだと思います。

もう一つ、僕は機械工学の分野から歴史小説に進んだのですが、それが非常によかったことがあります。なぜなら、技術や、工業生産に対する基本的な理解ができているからです。往々にして、日本の歴史学者や歴史小説家は、技術についての理解は浅いのです。例えば、火縄銃をとってみると、1550年代と70年代がどう違うのかという認識もないわけです。

**小畑** なるほど。わかるような気がします。安部さんの最近の著書の「五峰の鷹」で硝石の南蛮貿易を取り上げられたのがありますが、やはり高専で学んだことが役に立っておられるのでしょうか。

**安部** そうです。信長は鉄砲の大量使用で天下を取ったと教科書で教えていますけれども、じゃあその火薬はどうしたのだ、弾の原料の鉛はどうしたのだということ、鉛も、火薬の原料の硝石もほとんど輸入なのです。だから、南蛮貿易の輸入ルートを持たなければ、合戦に勝てないわけです。今の企業経営と全く同じで、戦国大名の領国経営もそれに似たようなものなのです。

鉄砲をつくる技術もそうです。鉄砲の砲身は、二重構造になっており、内側が軟鋼です。軟らかい鋼で巻いて水道管のようなものをつくり、それだけでは火薬の爆発力に耐えられないので、周りを鋼で葛のように巻いていくのです。この軟鋼をつくる技術が当時の日本になく、その軟鋼も輸入だったのです。こういうことを、歴史学者も、歴史小説家もこれまで触れてこなかったのです。

## 「進化する高専」グローバル化にも対応

**安部** 高専は、制度ができてから半世紀が過ぎ、僕が卒業した頃とだいぶ変わってきているのではないかと思います。どうなのでしょう。

安部 龍太郎氏

久留米工業高等専門学校  
機械工学科卒業  
1990年 作家デビュー  
第148回直木賞受賞



**小畑** 高専制度ができたのが1961年(昭和36年)で、翌年に第一期校として12の国立高専が誕生しました。2年前に高専制度創設50周年記念式典を行ったのですが、50周年を迎える段階で高専全体では「進化する高専」というキャッチフレーズを掲げました。

50年間の歴史というそれなりに重みがあると思いますが、発足当時と今の高専に対する社会からの期待は大きく変わっています。日本の産業構造はグローバル化が急速に進み、科学技術も相当急速に進展した結果、当初の高専の最大ミッションである、実践的な技術者、会社に就職してすぐ役に立つ技術者、中堅的な位置付けの技術者育成だけでは不十分となったのです。

それに加え、自ら課題の解決策を探り当てられるような創造性を備えた技術者を育成することによって変わってきています。教育で創造する力を育むこと自体、大変困難です。一定の教育方法が確立しているわけでもありません。そういう意味で「進化する高専」は、現状に満足せず、常に高みを目指して、それぞれ自己変革していこうというキャッチフレーズなのです。

## 今日の高専教育!

**小畑** 高専では本科5年を卒業する学生のうち、約4割がさらに進学しています。高専の本科の上に設けられた2年制の専攻科への進学、または大学3年次への編入です。高専によっては卒業生の8割ぐらいが進学する学校もあります。卒業生の半分近くが大学などに進学をする時代です。

それと専攻科を出てから大学院に入る学生も相当数に上っています。そういう意味では5年間の本科だけでは不十分で、より高度な科学技術的な素養を身につけるのが、一般化してきたと思います。

**安部** 理事長は、前職で東京農工大学の学長をされたそうですが、農工大に編入した高専生諸君はどうでしたか。

**小畑** 極めて優秀で、評判が良い。農工大に限らず、どこの大学でも編入生は評価が高いですね。4年になると、卒論が始まります。そうすると、下から上がってきた学生に比べて、卒論の研究テーマに取り組む姿勢が全然違う。放っておいてもどんどんやってくれます。そういう意味で、産業界が「高専卒は大卒よりも本当の実践力がある」と言っておられる点は、大学に進学した高専生についてもまったく同じですね。

**安部** 僕の頃は、大学へ編入学するのは、クラスで非常に優秀な1人か2人でした。だから4割も進学していると伺って、隔世の感があると思ったのです。僕のラグビー部の先生が「おい安部、おまえがいた頃とは、もう違う学校になっているぞ」と言われましたが、それだけ良い人材が集まり、立派に育っているということで嬉しいですね。

**小畑** 全国の国立高専の卒業生の約6割は就職しています

が、おかげさまで就職率はまったく問題がなく、ほぼ100%です。

**安部** 確かに選択肢が多いという面も含めて、高校から大学へ行くよりは非常にいいかもしれないですね。

**小畑** 今は本科3年を修了すれば5年で卒業しなくても、高校卒と同様に大学の受験資格もあります。また本科の上に専攻科もできていますから、大学へ行かなくても、高専で更にと2年間勉強し学士号を得て、高専で7年過ごして大学院へ進む、あるいは企業へ就職することもできますから、出口も多様化しています。

**安部** 高校の人たちから、それはずるいという声が出そうなくらいですね。

**小畑** そのほか、2010年に高度化再編といまして、一つの県に高専が2校ある宮城、富山、香川、熊本県では、それぞれ一校に統合しました。学科数を減らす代わりに専攻科を強化、高度な教育、研究ができる高専に生まれ変わっています。今年度末、高度化再編を行った4高専が丸5年を経過して、統合後に初の卒業生が出る段階になっています。

それから、現在グローバル化が急速に進んでおり、海外への留学が大きな動きになっています。毎年30人を超える学生が1年間いろいろな国の学校に留学して、1年間学んで国際的な経験を積んで帰ってくる高専もあります。ほかにも、海外へのインターンシップに行くとか、短期留学をやるとか、学生に国際経験を積ませるといった動きが非常に急速に広がっています。

## 国内外から高い評価を受ける高等教育!

**小畑** 2004年、国立高専が独立行政法人化され、それまで各高専が文科省のもと独立して運営をしていたのが、国立高等専門学校機構の下にすべての国立高専が配置される形になり、一つの巨大な組織に生まれ変わりました。その規模のメリットを生かそうと、高専機構の本部が中心になって、いろいろな取り組みをやっています。そのひとつが、海外インターンシップです。高専の学生を海外に3週間派遣し、日系企業で実務を経験するとともに、主に英語を中心にしてコミュニケーションを図る経験もさせています。

今は毎年40人前後ですが、当面、年間100人派遣を目標に努力しています。それが実現しても、国立高専の学生は1学年1万人いますから、わずか1%です。

それから、大学ではスーパーグローバルユニバーシティというプロジェクトがスタート、選ばれた大学に国が大きな予算をつけて、グローバル化を積極的に進めています。スーパーグローバルハイスクールというものもあります。高等学校でも授業を英語でやるとか、外国人教師を採用するとか、グローバル化に対応する人材育成への対応をしています。こちらにも予算がついていますが、残念ながら、高専は対象から外れています。

そこで、我々は、独自にグローバル化への対応を進めてい

ます。モデル校を2校選び、授業の英語化を積極的に進めたり、全学生に海外留学経験を積ませたりするなど、グローバルに活躍する人材育成の仕組みをしっかりと作り組んでいくところです。

創設当初と比べ変わってきた点のもう一つは、授業のやり方です。今、情報技術が急速に発達する一方、先生方は授業、研究、部活や寮の指導など、ものすごく忙しい状況です。授業の負担も、大学の先生に比べるとはるかに重いので、ICT(情報通信技術)システムを使って、先生方の授業負担を減らす仕組みの検討を始めています。例えば、ベーシックな科目は、優れた授業をICTの技術を使って全国一斉に配信し、それを学生が受講する方法です。もちろん授業のクオリティーが落ちることのないよう気をつけながらです。

普及するには相当な年限がかかると思いますが、この5年間に検討を終えて、実際に運用を始めたいと鋭意取り組んでいるところです。

**安部** 僕は、学生として高専の中にいたので、ちょっと客観的にわかりにくいところもあるのですが、理事長が御覧になって、高専スピリッツの一番の中核は何だと思っていらっしゃいますか。

**小畑** 中学を卒業して間もなくの2年生から専門教科が始まります。専門教育といっても机上の空論に近い話ではなく、実験、実習、演習などがありますので、そこで本当の工学なるものがわかるのではないかと思います。そこが大学とは決定的に違うところだろうと思います。

今、大学の工学部教育は、高専がやっているような方向にどんどん変わっているのです。大学教育が高専化している、と私はよく言っています。でも、大学の専門教育は3年から始まり、2年までは一般教養が中心です。つまり高専生から見ると、大学は、高専の本科を卒業してからが専門教育になっているのです。そこが大きく違うと思います。中学を卒業して、まだ柔軟な思考を持っている段階から実験、実習などを通して身についたものは大きいですよ。最初にデスクワークで習った後、実験実習を少しやるというようなことでは、なかなか身につくものではないという気がします。

**安部** この前、ある新聞で高専制度をアジアに輸出するという記事を見て、これは良いことだと思ったのですが。

**小畑** 現在、アジアの国々から、日本の高専を模範にした制度を是非つくりたいという声があります。現在、51国立高専全体で、マレーシア、モンゴル、インドネシアなど20以上の国から約420人の外国人留学生がきています。モンゴルの教育大臣は仙台高専の卒業生です。まだ若く、40代かもしれません。昨年、日本に大臣が訪れたとき、お会いして話をしたのですが、ぜひ高専をつくりたいということでした。国立高専機構の予算では、海外に高専を創る支援はできませんので、例えばJICA

(国際協力機構)を通じた支援の枠組みも必要ですが、精神的に大いにサポートしようということです。

それ以外のトルコやベトナムでも同じような話がございませぬ。何年後と今はつきり申し上げられませんが、近いうちに東南アジアで高専ができるのではないのでしょうか。我々としてはできる範囲で積極的にサポートをしようという意気込みで臨んでいます。

**安部** それだけ、海外でも高専教育のクオリティーが評価されているということでしょうか。

**小畑** その通りだと思います。我々がよく引用するのが、OECD(経済協力開発機構)調査団が、日本での高等教育の現状を調べて、2009年に出した報告です。その中に、「日本の高等教育で成功しているのは唯一高専制度である」という表現がございませぬ。

**安部** それはうれしいような、悲しいような。

**小畑** それから2、3年後、米国のワシントン・ポスト紙が日本の高等教育の調査をして、高専制度のすばらしさは、大学教育が成しえなかったところをカバーしていると指摘しています。どうということかといひますと、産業界が欲している技術者像と、大学や大学院が教育して社会に供給している人材は、現場での技術レベルに大きなギャップがあり、そのギャップを見事に埋めているのが高専であるということなのです。そういうことで、OECDの調査団では産学連携活動が極めてうまくいっている、特に中小企業と高専との関係がすばらしいと具体的な評価まで出しているのです。

**安部** それはうれしいですね。

## 作家になろうと思ったきっかけは!?

**小畑** 作家としての安部先生のことを少しお聞きしたいと思うのです。先ほどの話の中で、先生が久留米高専に入られて、自分が本当にやりたいことをいろいろ探したという期間があったようですが、作家になろうという考えが固まったのは、どういったことが動機で、いつ頃だったのでしょうか。

**安部** 先ほど申し上げましたが、3年生のカリキュラムが終わって1年間休学したとき、自分自身の中に一般教養がちょっと不足していると感じました。その不足を埋め、自分が何をやらたいかを探す意味でも、休学の間司法試験の一次試験を受けたのです。当時、社会主義思想が若者たちの心をとらえ、社会正義を求める人たちが社会主義の中にその理想を見る傾向がありました。僕もそういう洗礼を受けたほうで、社会派弁護士になろうと思ったのです。

司法試験の一次試験は、その受験のための資格試験で、大学2年程度の教養をみる試験なのです。それにパスしたら、学校を正式にやめ、独学で司法試験に挑戦しようと思っていたのです。

ところが、一次試験にパスすると、法律は道具なのだとわかってきたのです。自分が求めているのは、人間はどう生きるべきか、どうしたらこの世の中は良くなるのかに対する問いかけでしたから、法律には、おのずから限界があるとわかったのです。

一方、僕の持っていた問題意識にびたつと合うのは、文学でした。実を言いますと、戦後無頼派の作家たちの作品を読んで僕自身が救われたことがあったわけです。この社会との違和感、世界との違和感を持っているのは自分だけかなと思っていましたが、そうではなく、無頼派の作家たちもみんな同じものを持っていたのです。それで、自分はどう生きるべきか、自分の価値観とは何かというようなものを文学の中に追求していたわけです。おかげで、気持ちが楽になり、救われました。

このような影響を人に与える仕事ができるのなら、自分も作家になりたいと思ったのです。

## 影響を受けた作家は!?

**小畑** 一番強く影響を受けた作家はどなたですか。

**安部** 最初は坂口安吾と太宰治です。しばらく文学を勉強して、本当の文学の神髄を教えてもらったのは、ドストエフスキーです。

休学していましたが、復学して卒業後に作家の道を目指そうと思いました。学校に入れてくれた両親とか、期待をしてくれた人たちにきちんと応えなくてはいけないというのがあって、卒業だけはきちんとしようと思いました。それで、作家修業をやるにはどこが一番いいかを考えると、当時、役所に行って図書館に行くのが一番いいのです。おそらく卒業して10年間の修業期間が必要で、その間をどう過ごすか考えたとき、企業ではそんな悠長な時間は取れないだろうとほぼわかっていたからです。

**小畑** いいお話で。現在、悩んでいる学生も多分いるのですが、先生のお話に触れたら、ホッとして新たな勇気が湧いてくるのではないかと思います。実は、私は現在、大学セミナーハウスの評議員になっていますが、その評議員の中に直木賞作家の篠田節子さんがいらっしゃいます。あの方も八王子市役所に勤めながら、作家修業の教室に通われたのでしょうか。

**安部** はい、カルチャーセンターみたいなものです。

**小畑** そうすると、高専生も作家を目指す方は、就職先としてどこか市役所や区役所が良さそうだということでしょうか。

**安部** 図書館に行けば、司書となって図書に関わる時間が非常に増えます。ただ、僕が就職した頃の役所は、まだ勤務体系が非常に緩やかだったです。ところが今は、インターネットなどで仕事をしているので、厳しくなっているみたいですね。これは社会全体がそうなのだと思いますが。

**小畑** 安部さんは、久留米高専でラグビー部のほかに文芸部にも入っておられたそうですね。

**安部** 復学してから、文芸部に入りました。ラグビー部との掛け持ちでした。同じ号に自分の名前でも何篇も出すのは恥ずかしかつたし、少なかった部員を多く見せようと、ペンネームも幾つか使っていました。文芸部で発行していた雑誌「筑水」(チクスイ)に発表した作品が学内で好評を博しました。19歳のときで、初めて活字になった作品です。先生方からも褒めていただき、俺には才能があるのだなど、木に登ったのが運の尽きだったかもしれません。そういう環境をつくってくれたのは、高専に対する恩義です。だから多様性というのは重要なことで、創造性にもつながると思っています。

**小畑** おっしゃるとおりだと思います。

**安部** 高専の寮にいたときに、親しい先生が宿直の日は、みんな宿直室に集まってお茶会、今でいうティーパーティーをしていました。先生は文学の専門家で、いろんなことを話してくれました。そういうものが一つの財産になっていますね。

**小畑** まさに全人教育ですね。安部さんは、小さい頃から書くことが好きだったのですか。

**安部** 特に意識したことはないですね。ただ、本を読むのは好きでした。中学生の頃、自分のノートの中に、何か小説じみたものを書いたことはありましたけど。今では、どこに行ったかも、わかりませんが。

## 「等伯」執筆に至ったいきさつ、込めた思いは!?

**小畑** 安部さんが昨年直木賞を受賞された「等伯」ですが、私も読ませていただき、感激をいたしました。小説の対象として、絵師はユニークな対象ではないかと思うのですが、狙いや強い動機があったのかなと想像しています。

**安部** 僕はずっと戦国時代の小説、特に織田信長の小説を書いてきました。



**小畑 秀文氏**

東京大学大学院工学系研究科 博士課程修了  
工学博士  
元東京農工大学長  
国立高等専門学校機構理事長

なぜ信長かといいますと、わからないからなのです。天才なのか、狂人なのか、あるいはもっと違う何者なのか。20年近く書いてきて、やっとわからない原因だけは、わかったのです。それは何かと言いますと、戦国時代の歴史を江戸時代の史観で描いているからなのです。江戸史観は何かと言いますと、一つは鎖国で、もうひとつは士農工商の身分差別史観です。

鎖国史観は、例えば戦国時代を取り上げた大河ドラマなどを見ていただくとわかるように、外国の影響をほとんど抜きにして描いています。しかし、戦国時代は、ヨーロッパの大航海時代に当たり、その余波を受けて、スペイン人、ポルトガル人が東南アジアに進出、日本そのものも動かしていくダイナミズムの時代ですから、それを鎖国史観で語ったら、全くわからないわけです。

身分差別史観でいいますと、多くの戦国時代小説などには商人と流通業者の活躍が低く、無き者のように書かれています。ところが逆に、戦国時代は重商主義の時代です。つまりヨーロッパのグローバル化と、1532年に発見された石見銀山の銀が東南アジアに大量に輸出されて、東南アジアから大量の輸入品が入ってきた、いわゆる高度成長時代で重商主義の時代なのです。それをいわば江戸史観で書いているものですから、戦国時代の解釈が全く間違っているのです。

それを何としても是正したいと思って、いろいろな小説を書いてきたのですが、江戸史観によって描かれた戦国時代史に慣れた人たちの耳に、なかなか届かなかったのですね。これを何とか打破する方法はないだろうかという7、8年前から考え始めまして、そうだ、絵師の小説だったらと思いついたわけです。

例えば、誰もが等伯の絵を自分で見ることができ、自分で等伯の絵と対話できます。そうすると、江戸史観も、450年という時間の隔たりも飛び越え、現代に生きる我々が直接彼らと対話できます。その人生を書けば、そのもどかしさを飛び越えられるのではないかと思ったわけです。

**小畑** なるほど。等伯を読んでいて、安部さんは相当な絵描きさんではないかと勝手に想像していました。なぜかといいますと、安部さんの小説の中で、等伯が描きたいものがなかなか描けないで苦悶する場面がありますね。これは多分、絵を描かれる方でないと、わからないことではないかと勝手に想像していたからです。

**安部** いや、実は、等伯を書こうと思ったときから水墨画の教室に通い始めました。水墨画はどう書くのか、筆の使い方はどうなのか、濃淡のグラデーションをどうつけるのか、いろいろな水墨画の基本的な素養を2年間、水墨画の円山派の先生から教えていただいたのです。それは最後に松林図という等伯の傑作を書くための一つの作業でもあったのです。そういう点で訓練をしたというのはありますが、実を言うとそんなに絵に詳しい方ではないのです。

じゃあ、何故ああいうふうに細かく書けるかといいますと、小説を書くことと絵を描くことは、対象に向かう意識という面であるところまで一緒だと思うのです。だから、等伯の作品と僕自身が対話して、これは何を描こうとしたものかというのをとらえたら、それを表現するための難しさは、どういうところにあるのか、表現者としての内面の葛藤はある程度わかるわけです。だから、絵そのものが詳しくなくても、小説的な苦悶を等伯の中に投影していく形で、ああいうふうに書けたのではないかと思っています。

**小畑** いや、私から言うと、かえって失礼かもしれませんが、あの苦悶する姿の描き方だけ見ても、安部さんの筆先はさすがだと思いました。

**安部** 「等伯」を新聞連載しているとき、3.11の大地震が起きました。地震だけではなく、原発事故も誘発してしまいました。自然災害だけでなく、原発システムという現代文明を支えたものの破綻という形ですから、非常に大きなショックを受け、書けなくなった人たちがたくさんいるぐらいなのです。僕自身も大きな葛藤がありました。そんな現状を目の前にして、小説を書く意味があるのかという問いかけです。けども、自分には小説を書くことしかできないわけですから、どうしたら自分のこの表現、創作活動を意味あるものにできるかを随分考えました。その中でたどり着いたのが、被災された方々の心に届く物語、心に届く等伯を書かなくてはいけないのだという思いがありました。それが、等伯像というものにもう一つ厚みを加えてくれたのではないかと考えています。

## 小説家 隆慶一郎について!

**小畑** あと一つ、脚本家で小説家の隆慶一郎についてお聞かせください。あの方の小説は、先生の作品と対象としている世界がオーバーラップし、おもしろさの点でもよく似ているという気がするのです。インターネットに、隆慶一郎が最後に会いたがった作家が安部先生だと書いてあったのですが、実際にお会いになったことはないのですか。

**安部** 会ったことはないのです。あの方は1980年(平成元年)にお亡くなりになりました。ちょうど僕がデビューした直後、担当編集者が同じだったものですから、是非とも隆さんに会わせてくれとお願いしていたのです。ところが、隆さんもその頃、大流行作家になられて、山ほど仕事を抱えていらっやした。それで、会えなくて、それからしばらくしたら入院されたという話を聞いて、それならぜひ見舞いに行かせてくれって言っていたら、行く機会もなくて、お亡くなりになったのです。

**小畑** そういう意味で、隆慶一郎の生まれ変わりに安部さんがなっておられるのかもしれませんがね。

**安部** そう言っていたら、非常にうれしいですね。

**小畑** 隆慶一郎は、5、6年という短い小説家としての年限で

したから、もっと長く活躍されていたら、本当に素晴らしい作品をもっとたくさん残したと思うのですけど。隆慶一郎の分まで、ぜひ良い作品をたくさん残していただけたらと思います。

**安部** 実は、僕は隆さんの小説を読んで、時代小説に一生かけても悔いはないと思った方ですから。フランス語の先生をなさっていた方ですから、文学に対する深い理解があり、脚本家も長くなさって大衆性もありました。それともう一つ、学徒出陣してらっしゃるのです。満州に出陣して周りで友達が死ぬのを随分見てきて、戦後無頼派の人たちと似たような世界観をずっと持つておられたようです。隆さんが61歳の時にお書きになった作品に結実しているところがあります。文章も非常にうまいし、物語のつくり方も上手でした。僕が、手本に、目標にしている作家です。

**小畑** そういう意味では相思相愛なのですね。

**安部** 先におっしゃっていただいたように、入院中に僕の小説をベッドで読んで、この作家に会わせろと、言ってくれたそうです。

## 今後の活動について!

**小畑** 安部さんは、現在もいろいろと作品を書かれていますけど、今後の活動についての希望や狙いはどんなところにあるのでしょうか。

**安部** 僕は今、遣隋使、遣唐使の物語を書こうとしています。日本で、遣隋使が始まった600年、その後の遣唐使が始まる時代は、まだ日本が日本の形を成していなかった頃なのです。そういう国を、日本という形にするため、随とか唐とかに行つた留学生たちがいます。日本が経験した一番最初のグローバルの時代なのですね。

この遣唐使、遣隋使の功績は、ものすごいものがあります。そのことをしっかり理解しないと、「日本人とは何ぞや」ということを見失ってしまうのではないかという思いがあるのです。この間も中国に行ってきましたが、日本人が普通我々のものだと思っているものが、既に西安とか、昔の長安とか、洛陽には3000年ぐらい前からあるわけです。そういう視野を今の日本人は、持つべきだというふうに思っています、彼らの姿を書くことで、そのことについてアプローチしたいのです。まさに、グローバル化にどう対応するかという、今の日本人が直面している問題と密接に関わっていますし、東アジアの平和と友好にも関わってくると思っていますので、なんとかそこに挑戦したいと決意しています。

**小畑** 資料集めが大変でしょうね。

**安部** いや、本当にできるかどうかわからないのですが挑戦したいと思います。

**小畑** 期待しています。

**安部** ありがとうございます。



## 高専の将来像は!?

**小畑** 最後に、高専の卒業生としての立場から、今いる高専生への期待や、高専への注文をお聞かせいただけませんか。

**安部** 若いときに何をしたいか思えたことが一生を決めると思うのです。だから、小さくまとまらないで、大きな志を立て、そこに向かって長期計画を立て、一步一步、歩み続けるような生き方をしてもらいたいですね。僕はよく後輩たちに、「自信を持って、覚悟を決めて、努力を続ける」と言うのですが、そういうふうに生きてもらいたいですね。

それと、高専のよさは、学生の自主性を尊重していただくということだと思ふのです。先生たちには、受験競争の弊害のない自由な5年間という期間、自由に振る舞え、自由に活動したり、考えたりできる時間や場所を確保してもらいたいです。

**小畑** 現在の高専の置かれた状況を冷静に考えますと、国の予算が先細りになり、15歳人口が年々減っていくことが予測されます。5年、10年、20年先も、これらが劇的に改善する見通しは現時点ではありませんので、大変厳しい状況です。ですが、たとえ人口が減っても、高専の教育力をさらに高めることができれば、優れた学生が高専を選んでくれるはずで、高専の教育のクオリティーを現在以上にさらに高めることを第一に考え、それへの取り組みを鋭意始めているところでは。

それと、グローバル化の時代は避けて通れないので、まず英語力を早急に強化して、高専生は専門的な知識や語学も全く問題ない、素晴らしいというような教育ができるよう生まれ変わりを目指しています。

また、本科の上の専攻科の定員が本科の2割ぐらいに絞られているところがほとんどですが、それを寸胴形にして、中学校を卒業してから5年プラス2年のトータル7年の一貫教育で、大学卒あるいは大学院修士修了の学生に、全く引けを取らない高度な技術を身につけた技術者の育成機関としてさらに高度化できたら、と現在いろいろ努力をしているところでは。

これは、国の予算との関係で簡単に認められないと思うのですが、なんとしても実現して、高専という教育制度を揺るぎないものにしたいと思っています。

今、産業界は大学院で博士号を取得した者をなかなか採用しようとしません。企業から見て、役に立つ仕事をしてくれそうな人材ではないからなのですね。そういう意味で、私は高専が大学院の後期課程にまで、「高専スピリット」という芯で貫かれ、産業界に歓迎されるような博士号取得者も輩出できる高等教育機関に発展できたらいいなと思っています。

先生、これからも大いに御活躍を期待しています。本日はありがとうございました。

**安部** ありがとうございます。

(平成26年9月1日 學士會館(東京都千代田区)にて)

# 記念式典

平成26年11月1日(土)(10:30~11:20) 久留米市民会館 大ホール

## 次第

- 一、開式の辞
- 一、国歌斉唱
- 一、校長式辞
- 一、来賓者紹介
- 一、来賓祝辞
- 一、祝電披露
- 一、閉式の辞

## 記念演奏 (10:00~10:15)

### プログラム

指揮者 電気電子工学科 宮崎浩一 准教授  
演奏 久留米工業高等専門学校 吹奏楽部

1曲目: スティーヴン・ライニキー作曲『鷺の舞うところ』

2曲目: 福田洋介作曲『吹奏楽のための「風之舞」』

3曲目: 水野康孝作曲、松原昭彦吹奏楽編曲『久留米工業高等専門学校 校歌』



## 久留米工業高等専門学校 創基75周年・高専創立50周年記念式典





久留米工業高等専門学校長  
上田 孝

## 校長式辞

本日ここに久留米工業高等専門学校創基75周年・高専創立50周年記念式典を挙行政致しましたところ、大変ご多忙の中、文部科学省吉田高等教育局長をはじめ、多くの御来賓の方々の御臨席を賜り、厚く御礼申し上げます。

久留米高専は、本年創立50周年を迎えましたが、その歴史は今から75年前の昭和14年に、当時我が国に不足する工業技術者の育成という国策を背景として設立された官立久留米高等工業学校に遡ります。久留米市関係者の熱意溢れる誘致運動の末、地元からの多額の御寄附や御支援を戴いて設立されました。開校まで短期間であったため、校舎が間に合わず、近隣の企業の施設を借りて授業が始められ、一期生の方々は、建学の意気に燃えて、現在の小森野の地でグラウンドの開墾・整地などの土木作業に勤労奉仕をされました。

その後、昭和19年の学制改革により、名称が久留米工業専門学校に改められ、戦後の学制改革において九州大学に包括されて、九州大学久留米工業専門学校となり、小森野キャンパスには、九州大学の第2分校と生産科学研究所が設置されました。昭和26年に旧制工専は閉校となり、昭和30年の九州大学の福岡への統合移転を契機として、久留米に高等教育機関を存続させるために、同窓会、久留米市、市議会、商工会議所、教育委員会、地元企業の方々による積極的な働きかけが行われ、昭和33年に、小森野の跡地に我が国で最初の、大学とは独立した全日制の工業短期大学である久留米工業短期大学が設立されました。

昭和36年には、今日の高等専門学校制度のモデルケースとして、久留米工業短期大学に附属工業高校が設置され、5年一貫の我が国の工業教育システムが誕生しました。

本校は昭和39年に高等専門学校になりましたが、附属高校からの編入により、他の高専より1年早く、全国で最初の高専卒業生を社会に送り出しております。企業における高等専門学校自体の知名度がまだ低く、困難な状況の中での就職先の確保のために、旧制工専や短大の諸先輩方の積極的なご支援を頂いたと同っております。

今日までの75年にわたり、小森野のキャンパスにおいて、1万2千人を超える若人が学び、社会に巣立ち、各界で活躍されており、高等専門学校の本科からは約9千人の卒業生を、九州沖縄地区で最初に設置されました本校専攻科からは約6百人の修了生を輩出しております。

本校が今日まで、企業、大学、地元から高い評価を戴いておりますのも、ひとえに関係各位のご支援と卒業生の方々がお道を切り拓いて社会で築いてこられました業績の賜物であり、深く感謝申し上げます。

全国の旧制の高等工業学校の殆どが、戦後の学制改革の際に、学理の探求を主眼に置く国立大学の工学部あるいは工業系単科大学に移行しましたが、本校は、高等工業学校以来、その時どきの時代の要請に応え、一貫して実践的技術者の育成を目的とし、実社会において役に立つ学問を教授し研究を行う高等教育機関として、全国屈指の歴史と伝統を有しており、まさに工業技術者育成の本流とも言うべき道を歩んで参りました。

75年にわたる歴史のどの一コマを取り上げてみても、そこには小森

野のキャンパスを舞台に、苦しい中でも創意工夫をしながら学生時代を謳歌する若人と彼らを教え導く教職員の真摯な姿が見られます。

我々は、そのような先人の熱意と努力の上に、現在の久留米高専が在ることを決して忘れることはできません。当たり前のように勉強や部活などで日々を過ごしているキャンパスも、多くの諸先輩方の努力と汗の結晶として、今日存在しているのであります。

我々は、このような先達への感謝の念を常に忘れずに、この機会に、高工・工専・短大・高専のそれぞれの段階において、我が国のものづくり教育に先駆的な役割を果たしてきた久留米高専の原点に立ち返り、高専魂を堅持して、人の役に立つものを創り出す、世の中の牽引力となる決意を新たにすべきと考えます。

久留米工業短期大学の最後の学長と久留米高専の初代校長を務められました和栗明先生が、今から40年前の御在職中に書かれた「技術教育について」という論文に、高専教育の真髓ともいべき次のような言葉があります。「製図は製図工にやらせればよい、われわれ技術者はもっと深遠なことに取組むべきだとの風潮があるが、これはハンドワークを卑しむことに通ずるものではないか、まずわれわれは本当の技術者になって、働く人と一心同体となることが望ましい。」

この論文で和栗先生は、自らの手で実際に創ってみること、理論のみを学ぶのではなく、自分の手を動かして実験や実習を行うことの大切さを述べられています。

近年、科学技術が急速に進展する中で、我が国の少子化、グローバル化に加え、厳しい経済財政事情、さらには地震、火山噴火、豪雨などのかつてない規模の自然災害や地球規模の問題など、予期せぬ数々の課題が待ち受けている不透明で不確実な時代を、我々は進まねばなりません。

今後予想される厳しい局面を本校が乗り越えていく一助とするために、周年記念事業の一つとして、同窓会のご理解を戴き、同窓会と共同で記念募金事業を一昨年より展開しており、本校の教育研究活動支援のための記念基金を創設することとしております。募金事業に多大の御尽力・御支援を賜っております同窓会の皆様方並びに御寄附を戴きました卒業生、企業、団体、保護者、退職教職員及び現職教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

75年前に機械科、精密機械科、工作機械科、鋳山機械科、採鋳科の5学科で発足した高等工業学校が、その後の時代の要請に対応し、学科の改組充実を図りながら、久留米工業短期大学を経て、現在の機械工学科、電気・電子工学科、制御情報工学科、生物応用化学科、材料工学科の5学科から成る高等専門学校になりました。最近では、文部科学省に採択された公募型プロジェクトにより教育研究内容の充実を図るとともに、産学民連携テクノセンター、女子寮、ものづくり教育センターなどの施設や研究設備の整備、地元企業や関係機関によるテクノネット久留米の発足など、本校の教育・研究・地域連携機能の充実が図られてきております。

長年の歴史と伝統の中で醸成された自立を育む自由な校風が今後も継承され、本校で学ばれた方々が、高専で得られた知識や経験を基に、社会の様々な分野で活躍され、久留米高専がさらに飛躍できますように、文部科学省、国立高等専門学校機構、九州大学はもとより、卒業生の皆様をはじめ地元久留米の関係各位の一層のご理解ご支援をお願い申し上げます。

高専健児に輝きあれ!久留米高専に栄光あれ!と祈念し、式辞と致します。



## 来賓祝辞

文部科学大臣 下村 博文 様

本日ここに、久留米工業高等専門学校創基七十五周年・高専創立五十周年記念式典が盛大に挙行されますことを心よりお喜び申し上げます。

吉田 大輔氏

久留米工業高等専門学校は、その淵源を、

昭和十四年に設立された官立久留米高等工業学校に遡り、昭和三十六年には、久留米工業短期大学に附属工業高校が設置され、現在の高等専門学校制度の先駆けとなる学校が開設されました。

その後、昭和三十九年に我が国の高度経済成長を背景とした、実践的技術者の育成に対する産業界からの強い要請に応じて、高等専門学校として設置され、今日に至るまで九千人を超える優れた技術者を輩出されております。

この間、卒業研究に企業との共同研究を積極的に取り入れた教育の展開や、設計製図、シミュレーションから加工製造、試験評価までの一連のものづくりを体系的に学習する取組を進めるなど、地域と連携しながら教育の質の向上に大きな力を入れて取り組んでおられます。

また、こうした地域の企業や関係機関との連携を強化するために、平成二十四年には「テクノネット久留米」を発足し、現在七十以上の地元企業や地域の商工会、自治体等を加え、相互の連携・交流を推進されており、地域の発展に大きく貢献してこられました。

これまで多くの困難を乗り越え、創基七十五周年・高専創立五十周年を迎えられましたのは、上田校長をはじめとする歴代の校長、教職員の皆様、そして各界で活躍されている久留米高等工業学校以来の卒業生及び同窓会久留米工業会をはじめとする高専を支援してこられた数多くの皆様の御尽力の賜物であり、関係各位のこれまでの御貢献に心から敬意を表します。

近年の社会経済環境の変化や知識・技術の高度化に伴い、五年一貫の実践的専門教育を行う高等専門学校への期待はますます高まっており、文部科学省といたしましても、高等専門学校の更なる発展のために必要な支援に努め、将来の我が国を担う実践的・創造的技術者の育成に一層力を注いで参ります。

久留米工業高等専門学校におかれましては、『自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成』という教育理念の下、地域社会や関係機関との連携を更に深め、グローバル社会で活躍できる知識、技術、識見を兼ね備えた技術者の養成に一層努められますことを期待しております。

結びに、本日御臨席の皆様におかれましても、引き続き久留米工業高等専門学校に対する御支援、御協力を賜りますようお願いいたしますとともに、久留米工業高等専門学校のますますの発展並びに御臨席の皆様の一層の御健勝を祈念し、お祝いの言葉といたします。



## 来賓祝辞

国立高等専門学校機構 理事長 小畑 秀文 様

このたび、久留米工業高等専門学校が創基七十五周年・創立五十周年を迎えられ、本日ここに盛大に記念式典が挙行されるにあたり、国立高等専門学校機構を代表して、ひと言お祝いの言葉を申し上げます。

後藤 宏平氏

高等専門学校は、我が国における科学技術を支え、更にその進展を促すために、しっかりとした学術的な基礎の上に、真の実践的な技術を身に付けた第一線の技術者の養成を目的とし、五年間の一貫教育を行う新たな学校制度として、昭和三十七年度に創設されました。

久留米工業高等専門学校の歴史は、昭和十四年に設立された官立久留米高等工業学校まで遡り、昭和三十六年、当時の久留米工業短期大学に附属工業高等学校が開設され、我が国の高等専門学校制度の先駆けとなりました。昭和三十九年に久留米工業高等専門学校が設立され、その後、時代の変化とともに学科の整備拡充を図り、平成五年には、九州地区で初めての専攻科が設置されました。

そして今日に至るまで、「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」を教育理念に掲げ、文部科学省の公募型プログラムの採択などを受け、教育研究の充実を図りながら、多くの有為な人材を育成してこられました。これら卒業生は、我が国のものづくりの基盤と経済成長に大きく寄与し、産業界をはじめ社会の各方面から高く評価されております。

これもひとえに、上田校長をはじめとする歴代校長並びに教職員のご努力と福岡県、久留米市をはじめとする地元自治体、産業界、同窓会の皆様のご支援の賜と深く敬意を表します。

さて、高等専門学校の特徴ある課外活動として、全国規模の各種コンテストがあります。地区大会を勝ち抜き全国大会まで進むのは狭き門ですが、その間の一連の競技は、学生の発想力、技術力、チャレンジ精神、自律性などの総合的な技術者力・人間力を育成する重要な教育の場でもあります。久留米工業高等専門学校は、平成二十三年に開催された全国高専プログラミングコンテスト競技部門において、最高賞である文部科学大臣賞を受賞するほか、近年にわたって内外のプログラミングコンテストで優秀な成績を収めておられます。これらの例は、久留米工業高等専門学校における日常の教育の場に、その教育理念がしっかりと根付いている証といえるでしょう。

また、学生の研究力の育成や地域産業と市民との連携を進める場としての九州沖縄地区高専フォーラムや、全国の高専が参加するまでに発展してきた高専シンポジウムは、いずれも久留米工業高等専門学校の主導で始まった伝統ある研究集会です。地域に根ざした高等教育機関としての活動に止まらず、国立高等専門学校機構全体としての発展を視野に入れたリーダー的役割を果たす久留米工業高等専門学校に、心より敬意を表します。

国立高等専門学校機構といたしましては、高等専門学校に様々な役割が期待される中、創設以来の五十年を振り返り、これまでの高い評価に安住することなく、次なる五十年に向けて「進化する高専」をキーワードに更なる飛躍を目指す所存です。

久留米工業高等専門学校の教職員並びに学生の皆様におかれましても、これまでに築かれた伝統を継承発展されるとともに、本日の記念すべき日を契機として、更に決意を新たにされ、その成果をこの久留米の地から世界に向けて発信して行かれることを期待しております。

結びに、同窓会久留米工業会並びにテクノネット久留米をはじめとする地元産業界、さらに地域の皆様方におかれましては、久留米工業高等専門学校に対して、これまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げますとともに、本日ご臨席の皆様のご発展を祈念いたしまして祝辞といたします。



九州大学総長  
久保 千春氏

## 来賓祝辞

九州大学総長 久保 千春 様

九州大学総長久保でございます。  
本日、久留米工業高等専門学校創基七十五周年・高専創立五十周年記念式典がこのように盛大に挙行されることを、心よりお慶び申し上げます。

久留米工業高等専門学校は、我が国における高等教育の重要な一翼を担われ、多くの有為な人材を、産業界を中心として各界へ輩出してこられました。これは偏に、歴代校長をはじめとする教職員の一方ならぬご尽力と、文部科学省をはじめとした行政機関、久留米市並びに地元の方々、卒業生並びに在学生の保護者など、多くの関係者の御支援の賜物であり、ここに関係各位に対して深く敬意を表します。

久留米工業高等専門学校と九州大学は、その開校以来深いご縁がございます。昭和14年に設立されました久留米高等工業学校の初代校長には、九州帝国大学工学部の小林俊二郎教授が就任され、以来、久留米工業専門学校、久留米工業短期大学、そして今日の久留米工業高等専門学校と、長年にわたり密接な関係を持って参りました。

特に、戦後の学制改革により、本学が昭和24年に新制の九州大学として設置された際には、旧制の久留米工業専門学校が本学に包括され、九州大学久留米工業専門学校と改称されました。その構内には、九州大学第二分校が設置され、九州大学の理科系学生が学ぶ場所となりました。昭和33年に設立されました久留米工業短期大学においても本学の教官が教育研究に携わり、現在の久留米工業高等専門学校の教職員にも本学出身の方々が多数おられます。

近年においては、久留米工業高等専門学校からは、毎年優秀な本科卒業生が本学工学部に編入学され、専攻科修了生が本学工学系大学院に入学されています。また、久留米高専の特別講義や外部評価委員会への本学教員の派遣や事務職員の人事交流など、久留米高専と九州大学とは、非常に密接な関係で相互の発展に寄与しております。

九州大学は知の世界的拠点大学として、また、日本を代表する基幹総合大学として、都市とともに栄え、市民の誇りとなる大学を目指してまいります。

それぞれの伝統を基盤としながら、グローバル化や厳しい財政状況をはじめとする近年の高等教育機関を取り巻く急激な環境の変化、社会からの期待などに関して、新たな未来を築くために、絶えず自ら変革し、飛躍することが期待されております。

久留米工業高等専門学校におかれましても、今後とも次世代を担う多くの優秀な人材を育成されますことを強く期待申し上げます。

最後に、この記念式典が久留米工業高等専門学校にとって次の五十年に向けて更なる飛躍の契機となることを切に念願しますとともに、本日御臨席の皆様のご健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。



久留米市副市長  
橋本 政孝氏

## 来賓祝辞

久留米市長 橋原 利剛 様

久留米工業高等専門学校 創基75周年・高専創立50周年記念式典を挙行されるにあたり、久留米市を代表いたしまして、お祝いの言葉を申し上げます。

久留米工業高等専門学校が、本日、このような嘉日をお迎えになられたこと、誠にありがとうございます。75年にわたります、関係者の皆様のご尽力とご功績に、心より敬意を表するものでございます。

これまでの間、数々の歴史と伝統をつむぎながら、多くの優秀な技術者を輩出され、久留米市の学術研究機能の高度化と、社会の発展に多大な貢献をもたらしておられます。

また、平成18年には、久留米市と事業協力協定を締結いただき、特に産業分野を中心に、格別のご支援・ご協力をいただいております、あらためて、厚く感謝申し上げます次第です。

さて、皆さんご承知のとおり、今年、LEDの開発に貢献した3人の日本人に、ノーベル物理学賞が贈られました。

日本の技術力の高さを、あらためて認識したわけでございますが、「科学技術イノベーション立国」を目指す我が国においては、次の世代を担う子どもたちが、科学技術に夢と希望を傾け、志向を高めていくことは、極めて重要であります。

久留米市においても、ブリヂストンの創業者である「石橋正二郎」名誉市民や、東芝の礎を築いた“からくり儀右衛門”こと、「田中久重」など、これまで優秀な人材を輩出しており、こうした先達に“ものづくり”を学び、この伝統、系譜を発展させながら、バイオ産業や自動車産業など、新たな産業育成にも力を注いでまいりました。

このような、“ものづくり”の地で、「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」という教育理念を掲げる久留米工業高等専門学校の果たす役割は、大変大きなものがあると認識しております。

貴校に集う学生や卒業生の皆さん、その育成に真摯に取り組まれている先生方、さらに貴校が持つ高度な学術資源は、久留米市が誇る大きな財産であり、欠くことができない存在でもあります。

これからの久留米市が持続的な発展を遂げていくためには、ものづくりの伝統を受け継ぎながら、産学官の連携を一層深化させ、足腰の強い地域経済の振興に取り組まなければなりません。

久留米市のさらなる発展のため、今後も、まちづくりのよきパートナーとして、ともに歩んでいただきますことを期待しております。

最後になりましたが、関係者の皆様のご健勝と、久留米工業高等専門学校のますますのご発展を心から祈念申し上げます、お祝いの言葉といたします。



# 記念講演会

(平成26年11月1日(土) 11:30~12:30 久留米市民会館大ホール)

文化功労者である前豊橋技術科学大学長の榎 佳之先生により、「ライフイノベーション:先端技術がもたらす生命科学の新展開」と題して、記念講演会が行われました。

講演会では、産業革命によりさまざまな技術革新が起こったが、現在は健康・医療に関しての技術革新、ライフイノベーションが求められている。榎先生のご専門であるヒトゲノムの解読により、病気の診断、リスク予測が可能になるなど、医療に技術革新がもたらされた。

また、遺伝子とは異なる視点での研究、特に脳に関する研究も行われるなど、多くの技術開発が進められており、次世代への新技術として大きな期待が寄せられている、との講演がありました。

最後に、久留米高専学生に対する「未来へ向かって大きな夢と高い志を持って歩んでください。」との、熱いメッセージが送られました。

## 演題「ライフイノベーション:先端技術がもたらす生命科学の新展開」

21世紀には自然(地球)と調和した人類規模の発展が求められる

キーワードは「健康・医療」と「環境・エネルギー」

第4期科学技術基本計画

「ライフイノベーション」

目指すは先制医療(治療する医療から予防する医療へ)

革新的疾患予防・予測法の開発  
新しい早期発見・診断技術の開発  
治療法、治療技術の高度化



「グリーンイノベーション」

世界的な産業の発展、人口増加に伴う環境・エネルギー問題、食糧問題への対応

「安全安心社会」

自然災害に対する社会の安心・安全対策

(記念講演会資料)



## 講演者: 榎 佳之 氏

文化功労者、東京大学名誉教授  
前豊橋技術科学大学長

経歴: 東京大学理学部生物化学科卒

東京大学大学院理学系研究科博士課程修了理学博士  
理化学研究所ゲノム科学総合研究センター長  
豊橋技術科学大学学長

2014年6月より学校法人静岡雙葉学園理事長(現職)

業績: ヒト神経難病FAPの原因遺伝子の発見、ヒト「時計」遺伝子の発見、ヒトゲノム内の転移因子の発見、ヒト21番染色体の全解読等、ヒトゲノムの研究で国際的な業績を挙げる。国際ヒトゲノム計画の日本代表を務め、ヒトゲノム全解読に大きく貢献した。

表彰: 教育功労賞シュヴァリエ(仏政府)(2001年)、日本人類遺伝学会賞(2001年)、中日文化賞(2003年)、紫綬褒章(2003年)、文化功労者(2013年)等

# 祝賀会

(平成26年11月1日(土) 13:00~15:00 久留米市民会館小ホール)

## 次第

一、開会挨拶

一、来賓挨拶

一、鏡開き

一、乾杯

一、来賓挨拶

一、逍遙歌斉唱

一、閉会挨拶



開会挨拶 上田校長



来賓挨拶 津福同窓会会長



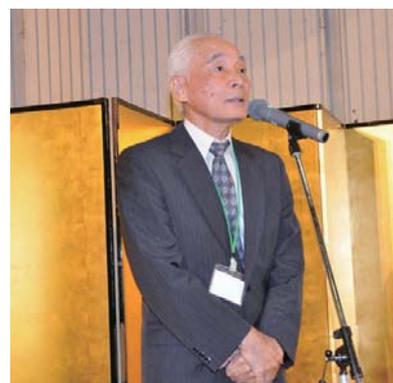
来賓挨拶 榊先生



乾杯 橋本久留米市副市長



鏡開き



来賓挨拶 前田前校長



来賓挨拶 安部龍太郎氏



来賓



同窓生

# 祝賀会

(平成26年11月1日(土) 13:00~15:00 久留米市民会館小ホール)



同窓会幹部、旧工専1期生



現役教職員、OB教職員



歴代校長



逍遙歌斉唱



逍遙歌斉唱



閉会挨拶 石橋雅功氏(新高専1期生)

## 創基75周年・高専創立50周年記念ロゴマーク



意匠:カラーの丸は、本校にゆかりのある五弁花(高専の桜、久留米市のつつじ、水天宮の梅)をイメージしながら、高専の5学科(黄色:機械工学科)、(紺色:電気電子工学科)、(空色:制御情報工学科)、(赤色:生物応用化学科)、(紫色:材料工学科)を表しています。

カラーの丸が一つで10年、合計五つで高専50年を表し、その礎となっ

ているグレーの丸が一つ5年、合計25年で、官立久留米高等工業学校創立から久留米工業専門学校、久留米工業短期大学を経て現在の高専創立までの25年を表しています。

カラーの丸とグレーの丸を上方にずらすことにより、現在から未来へ弛まず前身する姿勢を表現しています。

製作者:藤田雅俊 久留米高専教授(機械工学科)

## 記念品紹介



久留米の特産品(久留米餅)を材料とし、記念事業のロゴマークをあしらった名刺入れ

### 「ON THE TOPS」

ゴムの街・久留米のシリコンゴムと、焼き物の街・有田で製造されている高級磁器ボンチャイナのコラボレーションにより生まれた商品です。久留米市FS事業の助成を受け、



(株)久留米リサーチパーク・(株)Sing・久留米高専(機械工学科 藤田雅俊教授)の共同研究の成果であり、2012年度福岡県産業デザイン賞を受賞しています。

また、久留米市のふるさと納税制度の記念品にも選ばれています。

## 公開講座

## 小・中学生向け公開講座

講座名	実施時期	対象/人数	実施場所	実施内容
1 「エレクトロニクスサマースクール」	平成26年 7月24日～25日	中学生/8名	久留米高専	ライトレースカーを組み立てて、完成した車を使ったタイムトライアルを行いました。また、モータの加速実験、太陽光発電系統連系実験、雷放電実験を見学し、電気電子技術のおもしろさを体験しました。
2 「あなたも一日サイエンティスト」	平成26年 7月24日～25日	中学生/5名	久留米高専	数学の講座では、二次曲線の作図、离心率の考え方を学んだり、行列を用いて連立方程式を解いたり、結び目がほどけるかどうかの問題演習を体験しました。
3 「ソーラーカーを作ろう!」	平成26年7月24日～25日 平成26年8月6日～7日	中学生/13名 中学生/7名	久留米高専	ソーラーカーの組み立て作業を行い、完成したソーラーカーでスピードレースを行いました。また、ソーラーカーのドレスアップを行いデザインコンテストが行われました。
4 金属を溶かして 青銅鏡を製作してみよう!	平成26年 7月30日～31日	中学生/20名	久留米高専	木枠に砂を込めて、青銅鏡の鑄型を作製し、完成した鑄型に溶けた金属(青銅)を流し込み、金槌や火バサミなどを使って、鑄型から金属を取り出し、最後に、耐水ペーパーを使って磨き、青銅鏡を完成させました。
5 化学への招待 ～楽しい生物・化学教室～	平成26年7月31日	小学5,6年、 中学1,2年/38名	久留米高専	化学実験では、6種類の実験を通して、化学反応が演じる色の変化を観察しました。また、生物実験では、プロックリーのDNA抽出、光る物質を作る遺伝子を組み込んだ大腸菌の観察及び葉脈標本できれいな「しおり」作りを行いました。
6 「いっしょに、作ってみよう」 ～ラジオを組み立てよう～	平成27年3月28日(予定)	小学生・保護者12組	久留米高専	九州パワーアカデミー共催の下、スピーカーから音の出るラジオを保護者と協力して製作し、ものつくりの楽しさ、科学の不思議に触れる機会を提供し、電気電子技術のおもしろさを体験してもらいます。

## 企業等向け公開講座・技術セミナー

講座名	実施時期	対象/人数	実施場所	実施内容
7 「仕上げ作業実技講習会」	平成26年4月26日、5月10日、 17日、6月7日、21日、7月12日	社会人/6名	久留米高専	仕上げ作業に必要な技術を習得するとともに機械組み立て仕上げ技能検定試験合格を目指し、社会人・企業技術者が受講しました。
8 3D-CAD基礎講座	平成26年 8月25日～26日	社会人/12名	久留米高専	3次元CAD利用に関する基礎講習会として、3次元CAD実習及び3次元CADデータを用いた簡単なCAEシミュレーション実習を行いました。
9 3D-CAD/CAE公開講座	平成26年 9月24日～25日	社会人/6名	久留米高専	3D-CADの活用事例として、強度解析講座、振動機構解析講座、熱流体解析講座を通してCAE(コンピュータを使った解析)を学びました。
10 3D-CAD公差設計基礎講座	平成26年12月3日	社会人/20名	久留米高専	公差とは何か?公差設計とは?と思っている方に、基礎理論や活用方法を知って頂くための基礎講習会です。

## 科学技術展示・イベント等への参加

講座名	実施時期	対象/人数	実施場所	実施内容
11 ふれあい理工学展	平成26年11月9日	一般市民 約1,200名	えーるピア 久留米	久留米生涯学習フェスティバルの一環として開催された「第19回マナビランド」において「ふれあい理工学展」を出展し、「ロボットで遊ボット!」、「クリップモーターとLEDピカピカボールを作ろう。」、「コンピュータゲームと物理シミュレーション」、「マイクロカプセルペンダント」、「ふしぎな金属にさわろう」、「光りが魅せる不思議な現象」の体験・実験コーナーを設けました。



「化学への招待～楽しい生物・化学教室～」



「3D-CAD/CAE 公開講座」



ふれあい理工学展「ロボットで遊ボット!」

# 記念事業について

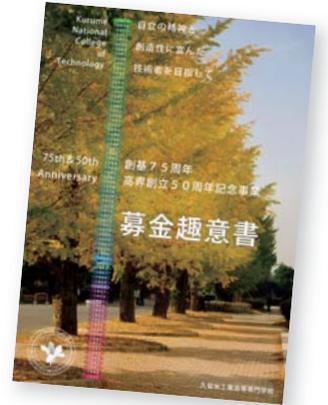
## 事業名

- 記念式典・記念講演会・祝賀会
- 基金創設
- 記念募金
- 記念誌の刊行
- 記念ロゴマークの制定
- 高専通信特集号の発行
- 公開講座の実施



## 募金状況

記念事業の一環として、平成24年10月から同窓会久留米工業会の全面的な協力を得て、共同で記念募金活動を進めています。平成26年11月末現在における募金金額は、26,536,820円となっております。



## 広報

久留米高専創立50周年・創基75周年記念対談

### 創造性と実践力備えた技術者を育成する高専教育

小畑秀文氏 (理事長) と 安部龍太郎氏 (理事長) の対談記事。両氏は、高専教育の重要性と、創造性と実践力を兼ね備えた技術者の育成について語り、高専が社会に貢献する役割を強調している。

### 久留米高専 開校75周年

さらなる飛躍誓う

記念式典

久留米市の久留米工業高等専門学校(上田校長)は1日、開校75周年と高専創立50周年の記念式典と高専創立50周年市民会を開催し、多くの卒業生や在校生、多くの卒業生や在校生、先輩の活躍を思いをたせながら、更なる飛躍への意気込みを新たにした。

### 久留米高専

- 中学卒業後の5年一貫教育
- 実践的で創造的な専門教育
- 多様な進路 (就職60% 進学40%)
- 高い求人倍率 本科23倍、専攻科72倍
- 本科から大学への編入 九大、阪大、熊大、東大、東工大、京大、阪大、技科大、本校専攻科等
- 専攻科から大学院への進学 九大、九工大、東大、京大、東工大等

創基75周年・高専創立50周年記念式典・記念講演会・祝賀会

【日時】平成26年11月1日(土) 10:30~15:00

【会場】久留米市民会館(大ホール・小ホール)

### 全国屈指の歴史と伝統を誇る 久留米工業高等専門学校

創立50周年の歴史と伝統を誇る久留米工業高等専門学校。最新の設備と実践的な教育で、高度な技術者を育成しています。

◆ 高度な専門教育

- 本科(工学、理学) [入学定員各学科40名]
- 専攻科(電気電子工学、機械情報工学、生産システム工学、材料工学)
- 専攻科(材料工学) [入学定員12名]
- 専攻科(電気電子工学) [入学定員12名]
- 専攻科(工学) [入学定員12名]

◆ 実践的で創造的な専門教育

- 実践・実習、卒業研究、インターンシップ
- 多様な進路 (就職60%、進学40%)
- 高い求人倍率 (就職60%、進学40%)
- 高い就職率 (就職60%、進学40%)
- 高い進学率 (就職60%、進学40%)

◆ 多様な進路 (就職60%、進学40%)

- 高い求人倍率 (就職60%、進学40%)
- 高い就職率 (就職60%、進学40%)
- 高い進学率 (就職60%、進学40%)

### 読売新聞 筑後かわらばん

平成26年11月15日掲載

久留米高専 開校75周年

さらなる飛躍誓う

記念式典

久留米市の久留米工業高等専門学校(上田校長)は1日、開校75周年と高専創立50周年の記念式典と高専創立50周年市民会を開催し、多くの卒業生や在校生、多くの卒業生や在校生、先輩の活躍を思いをたせながら、更なる飛躍への意気込みを新たにした。

### 西日本新聞 福岡県内版

平成26年10月17日掲載

久留米高専 開校75周年

さらなる飛躍誓う

記念式典

久留米市の久留米工業高等専門学校(上田校長)は1日、開校75周年と高専創立50周年の記念式典と高専創立50周年市民会を開催し、多くの卒業生や在校生、多くの卒業生や在校生、先輩の活躍を思いをたせながら、更なる飛躍への意気込みを新たにした。

### 読売新聞 九州・山口全県版

平成26年10月11日掲載

久留米高専 開校75周年

さらなる飛躍誓う

記念式典

久留米市の久留米工業高等専門学校(上田校長)は1日、開校75周年と高専創立50周年の記念式典と高専創立50周年市民会を開催し、多くの卒業生や在校生、多くの卒業生や在校生、先輩の活躍を思いをたせながら、更なる飛躍への意気込みを新たにした。

### 西日本新聞 筑後版

平成26年10月9日掲載

久留米高専 開校75周年

さらなる飛躍誓う

記念式典

久留米市の久留米工業高等専門学校(上田校長)は1日、開校75周年と高専創立50周年の記念式典と高専創立50周年市民会を開催し、多くの卒業生や在校生、多くの卒業生や在校生、先輩の活躍を思いをたせながら、更なる飛躍への意気込みを新たにした。